

研 究 者 か ら の メ ッ セ ー ジ

研 究

— けんきゅうびより —

日 和

Vol.
01

特集

理系女性研究者 Part 1

研究は楽しい。

膨大な文献をひも解き、数えきれないほど実験を繰り返す。

それまでわからなかったことを解き明かす感動、

そしてその先に、世界を変える、未来をつくる喜びがある。

ここにあるのは、

「なぜ?」「好き」をとことん追究する、

そんなワクワクすることを一生の仕事にした先輩たちの物語。

その一つひとつが、あなたの未来を照らす道しるべになることを願って

輝き続ける研究者たちの言葉を贈ります。

P.02



Case #01

未開拓の分野を
切り開く研究に挑む

小池 千恵子
薬学部 創薬科学科 教授

P.04



Case #02

パワフルな先輩研究者が
研究姿勢のお手本

木村 朝子
情報理工学部 情報理工学科 教授

P.06



Case #03

「好きなコト」を選んだ先に
研究者の今がある

向 英里
生命科学部 生命医科学科 准教授

P.08



Case #04

誰かの役に立つことが
研究の最大の喜び

岡田 志麻
理工学部 ロボティクス学科 准教授

P.10

ごあいさつ

田中 弘美
立命館大学 副学長
男女共同参画推進リサーチライフサポート室 室長

P.12

活動紹介

コラム

志磨 慶子
学校法人立命館 前常務理事
男女共同参画推進リサーチライフサポート室 キャリアアドバイザー

未開拓の分野を 切り開く 研究に挑む

小池 千恵子

薬学部 創薬科学科 教授

Profile

現・静岡県立大学薬学部を卒業。同大学で修士課程・博士課程を修了する。博士号取得後にハーバード大学の関連機関等に留学し、中枢神経系の研究に関心を持つ。帰国後、大阪バイオサイエンス研究所の研究員を経て、立命館大学薬学部へ。網膜の発生と機能を研究する。2017年より現職。

迷い、悩んだ 大学・修士課程

臍気ながらも研究に関心を持ったのは、小学校の夏休みの自由研究です。その頃から漠然と「将来は研究者になりたい」という思いを募らせていました。

大学は薬学部に進学したものの、修士課程までは自分が想像していた研究とは異なる環境に、「どう進路を定めたものか」と悩む日々が続きました。研究者としての基盤を築くことができたのは、博士課程に入ってから。博士課程に進学する学生が少ないためか、指導教官が、熱心に研究の進め方を教えてくれました。若いうちに優秀な研究者に基礎トレーニングを受けたことは、今振り返っても非常に重要なことだったと思います。

研究者としての転機は、留学です。博士課程での研究が評価され、アメリカのハーバード大学医学系大学院の関連病院である、ボストン小児病院に博士研究員として働けることになりました。世界屈指の研究機関です。修士課程の頃一人論文を読みつつ、どういう環境であれば、飛び抜けて優れた研究論文を出せるのかと思いを馳せていました。「最先端の研究とはどういうものか、自分の目で確かめてみたい」。そう願った通りの場所への留学でした。

アメリカ留学で 研究者として飛躍

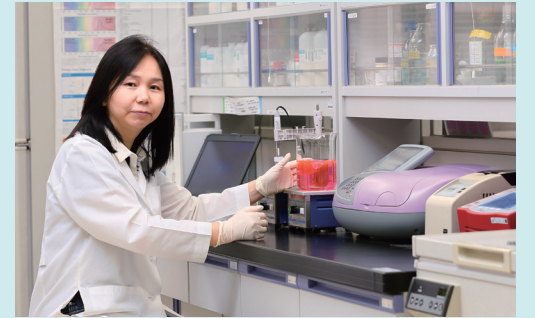
留学して最も衝撃を受けたのは、共に学ぶ大学院生たちの勉強の質と量です。日本ではそれなりの論文数を読みこなし、寸暇を惜しんで研究に打ち込んできたつもりでしたが、

ハーバード大学の大学院生の読む論文数にはとてもかなわないと感じました。研究環境が整っているから優れた研究成果を挙げられるわけではない。それはひとえにたゆまぬ努力の賜物なのです。「一日24時間、一瞬たりとも研究以外のことを考えるいとまがないくらい没頭しなければ、世界のトップレベルにはなれないのだ」と思い知り、これまで以上に身を入れて研究するようになりました。また、こういった経験により、自分が解放されたように思います。

留学先の指導教授の言葉で、今でも心に残っていることがあります。それは、「既存研究の後追いではなく、その分野の先端を切り開くような研究をしなければならない」、そして「研究するからには、例えば『ノーベル賞を取る』といった、高い目標を掲げて取り組みなさい」というものです。この二つの言葉は、今も研究する上での指針になっています。

留学先で 女性研究者との絆を深めた

研究というのは時代が進むに連れ、驚くほど進歩していきます。ボストンでノーベル賞受賞者の利根川進先生の神経科学研究についての講演を聞き、その可能性の大きさに心を動かされましたが、縁あって、現在中枢神経系の器官である網膜の発生と機能について研究を続けています。おもしろいのは、網膜は組織そのものを取り出して、その応答を測定できること。脳を取り出しても全容は調べることができません。しかし取り出した網膜は我々の眼同様、光を当てその応答を測定する



ことで、刺激が入ってきてからそれに対する反応までを調べることができます。視覚の回路や網膜の機能を明らかにすることで、まだ誰も成し遂げていない中枢神経系のメカニズムの解明に近づくことができるかもしれない。「未開拓の分野を切り開く」。まさにそんな研究に挑んでいるやりがいがあります。

留学中に得た大きな財産は、優秀な女性研究者との出会いです。当時女性研究者は少なく、留学生も少なかった一方、大層優秀で、学ぶところが非常に多くありました。そうした先輩研究者たちに刺激やアドバイスを受けたことが、異国での厳しい研究生生活の支えになりました。女性研究者は少ないだけに、研究者同士のネットワークを形成しやすいのか、現在までを通じ、互いに研究のアドバイスをしたり、励まし合ったりできる仲間がたくさんでき、貴重な財産となっています。

子どもの頃に思い描いた夢を実現すべく、これまで夢中で打ち込める研究や多くのすばらしい人々に出会い、広い世界を見ることができました。幸せな道を歩んでいると感じています。研究者を目指すなら、「やりたい」「おもしろい」と思ったことを決してあきらめないでほしい。そうすればきっと誰もが夢に近づけると信じています。

パワフルな先輩研究者が 研究姿勢のお手本

木村 朝子

情報理工学部 情報理工学科 教授

ヒューマンインターフェースから バーチャルリアリティまで

大学入学時には「こんなことを研究したい」と決めていたわけではありませんでした。基礎工学部を選んだのは、得意の理系学部の中でもとりわけ学問のバラエティに富んでいそうだという理由からでした。自分の研究テーマを選ぶ時になって、なんとなく「おもしろそう」と選んだのが、ヒューマンインターフェース (HI)。それが結果的に、修士課程、博士課程と研究を続けるテーマとなりました。

博士号を取得後、バーチャルリアリティ (VR) を研究する先生から助言を受けたことで、HIに加えてVRの研究も始めました。研究の方向が定まった転機は、立命館大学に着任し、現在特



別招聘教授である田村秀行先生と共同研究を始めたことです。田村先生は、VRの中でも「複合現実感」(MR) という分野で日本の第一人者です。田村先生のご提案でIMRとHIと一緒に研究しよう」ということになり、一緒に「リアリティメティア研究室」を立ち上げました。今では、MRとHIの両方が私の専門分野になっています。

研究者の母が ロールモデル

両親も、姉も、そして祖父も研究者という研究者一家に育った私は、当たり前のように「私も将来は研究者になる」と思っていました。

幼い頃から両親の研究室に遊びに行き、研究という仕事、研究室に先生や学生がいる風景をととても身近に感じていました。幼いながらも心に残っているのは、「研究室」というコミュニティがとても楽しそうだったこと。理系の研究室にはどこか家庭的な雰囲気があります。先生と学生、また学生同士が仲良く、互いに敬意を払いながら研究している姿を見て、「居心地よさそうだな」と思ったものでした。

何より一番のロールモデルになったのは、

母です。研究者として働く母を見て、「女性が仕事を続けるには、研究者も良さそうだ」と、わからないながらも思うようになりました。また進路に迷った時には、母は心強いアドバイザーでもありました。いつもかけてくれた言葉は、「何事もやってみないとわからないから、将来を心配し過ぎないほうがいい」ということ。「結婚も、出産も、仕事も、『もしこうなったらどうしよう』と想像すれば、不安になるけれど、結局は想像した通りにはならないもの。どんな結果になっても、最後は何とかなるから大丈夫よ」と励ましてくれました。母の若い頃は、女性が働くこと自体、私の世代より、ましてや今よりもっとハードルが高かったはずですが、それを乗り越えてきた母の言葉にいつも背中を押され、自分の歩を進めることができました。今日に至るまでには、私もさまざまな選択をしてきましたが、今でも母の姿勢が判断基準のベースになっています。

刺激し合える 仲間をつくってほしい

もう一人、私のキャリアを語る上で欠くこ

Profile

1996年、大阪大学基礎工学部を卒業。修士・博士課程を経て2000年、同大学基礎工学研究科助手に就任。2001年、アメリカのMayo Clinic, Biomedical Imaging Resource LaboratoryでSpecial Project Associateとして研究に従事。2003年、立命館大学理工学部助教授に。2004年、情報理工学部助教授となり、現在同学科教授。

とのできない存在が、田村先生です。当時から多くの人を巻き込みながら、パワフルに大きなプロジェクトを動かしておられました。明確にゴールを見すえて「この目的のためにはこれをすべき」といったことを瞬時に考え、リーダーシップを取ってプロジェクトをプランニングする姿を間近に見ながら一緒に研究したことが、今の私自身の仕事の仕方にも大きく影響しています。

研究者を志す学生に伝えたいのは、「今やるべきことを一生懸命すること」と「少し上のレベルにチャレンジすること」。「自分には難しい」と思うことでも、託されたことに一生懸命取り組み、たとえうまくいかなくても得られるものがあるし、世界の見え方も変わってきます。

またさまざまなコミュニティに積極的に参加してネットワークを広げることも大切です。研究には新規性が求められますが、一人の人間が思いつくことは限られています。研究過程では、指導教官や上司などに相談してアドバイスをもらったり、学会で発表して他の研究者から広く意見をもらうことも欠かせません。学生時代には特に学内外のさまざまな場所で活動し、刺激し合える仲間をたくさんつくってください。

農学部から 生体生理学研究へ

大学に進学した当初の夢は、修士課程を出て、将来は企業で研究技術職として働くこと。研究者になろうとは思っていませんでした。もともと動物や植物が好きで農学部を選びましたが、進学した農学部(農芸化学科)は幅広い学問分野に通じており、バイオテクノロジーや遺伝子工学、土壌や微生物など多岐にわたる学びに触れました。中でも私が興味を持ったのは、生体の生理学的な現象の数々です。

「生体を研究したいのなら、医学的な知識や技術が欠かせない。大学院は医学系に進んだほうがいいよ」。4回生の時、卒業研究の指導教員からそうアドバイスを受け、他大学の大学院を受験することを決めました。

大学院では、医学的な見地から生体を詳しく学び、狭かった視野が広がっていくのを感じました。現在の専門である糖尿病の研究を始めたのもそこからです。「修士課程まで」と思っていた当初とは裏腹に、さらに医学研究科の博



士課程に進み、研究を続けることになりました。

糖尿病になる メカニズムを探究

それまで知らなかった知識を貪欲に吸収し、新たなテーマを研究することが楽しかった一方で、研究者として大きな岐路に立ったのも博士課程でした。同じ研究室の博士課程の学生は私を除いて全員医学部出身で、医師として病院で臨床に携わりながら研究していました。彼らとは異なる視点で大学院にいた私は、がむしやらに研究し成果を上げることに集中していましたが、大学でポジションを獲得する難しさを感じるようになりました。それが研究に対するモチベーションにもなっていました。博士号を取得した後は医師ではない医学研究者としての将来像を考えながら、自分に合う研究機関を模索しました。

いくつかの大学や研究機関で研究実績を積み、2016年に立命館大学生命科学部に着任しました。現在は、糖尿病を対象に発症のメカニズムの解明と治療をテーマに研究しています。とりわけ私が対象としている2型糖尿病の患者数は、現在世界の成人人口の7~8%にも達するほど増加の一途を辿っており、解決策が待たれています。

糖尿病はインスリンと呼ばれるホルモンの分泌が相対的に不足することで起こる病気です。代表的な生活習慣病の一つで、その原因は多様で複合的なため、人によって効く薬も治療法も異なります。中でも私はインスリンを分泌する膵臓β細胞に焦点を当て、イン

スリンがどのように分泌されるのか、メカニズムを解明しようとしています。さらに糖尿病によって異常を来す部位を同定し、治療に効果のある物質の探索も進めています。

学生の成長を 後押しするのもやりがい

立命館大学に赴任して同学部や薬学部、スポーツ健康科学部の研究者の方々とかかわるようになり、研究の幅が広がりました。それまでの治療や創薬に役立つ基礎研究に加えて、予防法の探究に目を向けるようになったのもその一つです。現在は細胞レベルの研究と並行して、人を対象に運動習慣や食習慣の改善による予防の効果についても詳しくしようとしています。

准教授として自らの研究室を持つようになって、研究生活も変わりました。研究だけに集中していれば良かったこれまでとは異なり、今は学生を教育・指導したり、学生が研究できるテーマや環境を整えることも責務の一つです。自分が研究成果をあげるだけでなく、学生の成長を見ることが、新たなやりがいになりました。

振り返ると、最初こそ「研究者になる」という強い気持ちはなかったものの、その時々で自分の好きなこと、やりたいことを選んだ先に今があります。何より進路に迷った時、行くべき道を示唆し、背中を押してくれた恩師や両親がいたからこそまで歩んでこられたのだと思います。高校や大学の先生、身近な家族など信頼できる人からアドバイスを受けることで、自分では気づかなかった道が見えてくることもあります。後輩の皆さんにもそれぞれの可能性を追求してほしいですね。

Case #03

「好きなコト」を 選んだ先に 研究者の 今がある

向 英里

生命科学部 生命医科学科 准教授

Profile

1995年、京都府立大学農学部を卒業後、京都大学大学院人間・環境学研究科に進学。2001年、京都大学大学院医学研究科で博士課程を修了。1999年から4年間は日本学術振興会特別研究員として研究に従事。2005年、独立行政法人医薬基盤研究所研究員、2007年、京都大学大学院医学研究科研究員を経て、2012年、千葉大学大学院医学研究院講師となる。2016年より現職。

女性研究者のもとで 学びたい

幼い頃、解剖学の研究者だった祖父が国際学会に出席するため外国に行く姿を見て、「カッコいいな」と思ったことが、研究者を志す道の出発点でした。高校生の時、立命館大学の学校案内パンフレットを見て、ロボットと人間をつなぐ生体工学という学問を知り、「ここで学びたい」と思いました。念願がかない、3回生から生体工学の研究室に所属。指導教官の牧川方昭先生は、今も恩師と慕う存在です。

修士課程を修了後、自活するために一度は企業に就職。家電製品の研究開発に携わりましたが、いずれは博士課程に進学し、研究者を目指そうと決めていました。4年後、辞職・結婚を経ていよいよ博士課程の進学先を探し始めた時、最初に頭に浮かんだのは、「女性の実験者のもとで学びたい」ということでした。今後長く研究者としてキャリアを続けていくために、背中を追い続けていけるようなロールモデルを見つけないかと思ったからです。そこで専門分野が近い女性の実験者を探し、出会っ

たのが大阪大学で保健学の領域にありながらロボティクスに関心を持っておられた大野ゆう子先生でした。

研究室を訪ね、「ここしかない」と思った直感は間違いではありませんでした。博士課程で学びながら、子どもを妊娠・出産。そんな時、二人のお子さんを持つ大野先生が「一度休むと、戻ってこれなくなる。絶対に休まず、続けなさい」と厳しくも温かく励ましてくださったおかげで、博士課程を修了することができました。

「人の役に立つ」 研究を大切に

医学系研究科で博士課程を修めてもう一つ良かったのが、病院との接点ができ、医師や看護師から直接ニーズを聞いて研究につなげられたことです。博士論文では、大阪大学附属病院の小児科と共同で、ADHD（注意欠陥・多動性障がい）を持つ子どもの睡眠を無拘束・非接触で測定するシステムの構築をテーマにしました。ADHDのお子さんは睡眠時に体動の頻度が極めて高いことから、その

頻度を計測し、ADHDの早期発見に役立てようというものです。

センサーを体中に取り付ける従来の計測方法は、被験者にとって大きな負担になります。そこで私は大きな装置で被験者を拘束したり、計測機器を取り付けることなく睡眠状態を計測するシステムを考え出しました。それ以降も、病院と一緒にさまざまな生体生理を無拘束・非接触で検査する方法を開発してきました。

研究する上で最も大切にしているのは、「人の役に立つ」こと。医師のように病気を治療することはできないけれど、早期診断や病後ケアにおいて患者さんの負担を少しでも軽減できたらと思っています。私の研究室で学生に研究テーマを考えさせる際にも「身近な人でもいい。必ず誰かを助けることを目的にした研究テーマを見つけてください」と指導しています。

人との出会いが 財産になる

研究は楽しいことばかりではありません。

「もう辞めたい」と思ったことも何度もあります。続けられたのは、支えてくれる人がいたから。大学時代の恩師・牧川先生や博士課程で指導を受けた大野先生は、今でも親身になって相談に乗り、「がんばりなさい」と叱咤してくださいます。人との出会いこそ、研究者としての何よりの財産だと思いますね。

研究者として実績を重ねた今、新たに「産『患』学連携の研究システムを作る」という目標が見えてきました。検査・治療で用いられる医療機器の多くは、患者さんの負担を考慮に入れて作られていません。企業と大学、そしてそれを使う患者が一緒になって、患者自身が本当に満足できるものを開発する。そんな仕組みを作っていけたらと考えています。

企業の研究開発では、必ず収益を考えなければなりません。一方大学では、自ら研究費を獲得し、10万人に一人の稀有な病気の患者を助けるための研究に取り組むこともできます。私の研究が、たった一人でも誰かを助けることにつながったら、これほど嬉しいことはありません。



Case #04

誰かの役に立つことが 研究の最大の喜び

岡田 志麻

理工学部 ロボティクス学科 准教授

Profile

2000年、立命館大学理工学部ロボティクス学科卒業。2002年、同大学理工学研究科情報システム学専攻修士課程を修了後、三洋電機（株）で研究開発に携わる。その後、国立大阪医療センターなどで非常勤講師を務めながら、2008年、大阪大学大学院医学系研究科の博士課程を修了。同年、日本学術振興会特別研究員となる。2013年、近畿大学の講師に就任。2017年4月より現職。

未来の世界をつくる可能性に 満ちた研究者を育てたい



田中 弘美

立命館大学 副学長

男女共同参画推進リサーチライフサポート室 室長

自分が興味を持ったことを研究テーマとして徹底的に追究できるのが、大学の研究者になる魅力です。自らが解き明かしたことが、数年後、あるいは数十年後、新たな技術や産業の創出につながったり、人々の生活や文化をより豊かなものにしたりする。そうした未踏の領域を最初に切り開いていくチャンスを与えられている、とても幸福な仕事だともいえます。

言い換えれば、私たち研究者が未来の科学技術の発展、ひいては産業や経済、社会の礎を築いているともいえるでしょう。それだけに研究者の育成や研究しやすい環境をつくることは、極めて重要だと考えています。

専門性を究めていく道は、決して平たんではありません。大学で確かな知識の基盤を培い、探究心と向上心をもって地道な研鑽を続けていく必要があります。そうした長い道のりを経て一人の研究者が育つまでには、本人の志やたゆまぬ努力はもちろんですが、生活を支える親御さんや保護者の方々、指導する教員、あるいはサポートする国や大学など、物心両面で実に多くの愛情や支援、教育という名の投資がかけられています。そうして育んだ研究者の芽を簡単に摘み取るわけにはいかない。大学にもそうした強い思いがあります。そのため立命館大学では、研究者がいきいきと自分らしく研究に集中できるよう、組織や体制づくり、環境整備に着手しています。

例えば女性の研究者が結婚・出産といったライフイベントを経験しながら研究を続ける上では、さまざまな困難にぶつかります。女性特有のライフイベントだけ

でなく、大多数を男性が占める研究環境で、生きづらさや働きづらさを感じることもあるかもしれません。そうした課題を克服し、性別や年齢、国籍などあらゆる属性に関係なく、誰もが自分の力を最大限発揮できる環境をつくらなければ、日本、そして世界の未来は拓けないと考えています。

大学の研究者は、自ら研究するだけでなく、教員として「人を育てる」役割も担います。どれほど優秀でも一人で生み出すことのできる研究成果は限られています。それまで獲得してきた知見や研究の蓄積を学生や若手研究者に伝えることで、研究成果が未来に実りのある形で引き継がれていく。それもまた喜びです。

とりわけこれからは、一つの狭い専門領域だけでは地球規模で起こる問題や現代の複雑で複合的な課題を解決することはできません。次代を担う研究者には、幅広い研究分野に知見を持ち、多様な研究者と連携することが求められます。これから研究者を目指す皆さんにはぜひ、多様な分野に「知」を広げてほしい。未来をつくる革新的な研究に取り組む可能性に満ちた皆さんをお待ちしています。

Profile

1975年、お茶の水女子大学を卒業後、富士通（株）で3年間勤務。1981年、アメリカ・ロチェスター大学大学院マスターコースを修了後、大阪大学大学院博士課程に進学し、1988年に工学博士号を取得。（株）国際電気通信基礎研究所勤務を経て、1994年、立命館大学理工学部教授に就任。2004年より同大学情報理工学部教授。専門はコンピュータビジョンやバーチャルリアリティ。2016年より新設された男女共同参画推進リサーチライフサポート室で女性研究者支援に尽力。

男女共同参画推進 リサーチライフサポート室の活動紹介

男女共同参画推進リサーチライフサポート室は、男女共同参画推進委員会と協同し、ダイバーシティ研究環境整備を推進しています。

1. 意識改革と情報発信

● 各種シンポジウム・セミナーの開催

「多様性から創造性とイノベーションを創出する大学づくり～女性研究者が活躍できる研究環境の実現～」、「Beyond the Bias and Barriers ～女性活躍推進のこれからを考える～」等、多様なテーマで意識啓発のためのイベントを開催しています。



● 広報誌「News Letter」、リーフレットの発行、ホームページの作成



2. 教育・研究の推進と研究力の向上

● 研究支援員制度の整備

出産・育児・介護等のライフイベントと研究活動を両立できるよう、研究継続のために雇用する「研究支援員」の雇用経費を助成する制度を整えています。

● 科研費特別講演会の開催

● 学術英語論文のための基礎講習会の実施

3. 教育・研究と家庭の両立支援

● 臨時託児室の設置

● ベビーシッター・ホームヘルパー利用の費用補助

4. 女性研究者の採用・上位職登用

● 女性研究者の在職比率向上

● 新任教員サポート

本学着任後、研究をスムーズに開始できるようコンシェルジュサービスや理工系女性メンター制度等を整備しています。

立命館大学の男女共同参画基本方針

1. 男女共同参画の実現に向けた意識改革と情報発信
2. 国際的視点を含めた男女共同参画に資する教育・研究の推進と研究力の向上
3. 学修・教育・研究・就業と家庭生活との両立支援
4. 人的構成における男女格差の是正、女性研究者の採用・上位職登用の推進
5. 女性研究者の裾野拡大の推進

5. 女性研究者の裾野拡大

● 交流の場「立命研究者の会」

学部や学科、キャンパスを越えた研究交流の機会へとつながることを目標としたイベントを開催しています。



● 学内セミナー

本学所属研究者の研究発表およびフリーディスカッションを行うセミナーにて、女性研究者の発表月間を設けています。



コラム

総務担当 常務理事(前)として ダイバーシティ支援事業の 申請に関わって

志 磨 慶 子

学校法人立命館 前常務理事

男女共同参画推進
リサーチライフサポート室
キャリアアドバイザー

文科省は、女性の科学人材育成事業補助として、2011年度から「女性研究者研究活動支援事業」を開始し、2015年度から「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」と名称を変え現在に至っている。本学は、2014年度以降この支援事業にチャレンジし、3度目の申請である2016年度に採択された。

2014・15年度の2年間にわたり採択されなかった主な理由は、研究とライフイベント両立支援のための具体的取り組みや、自然科学系女性教員任用や上位職登用の具体策がみえないということであった。2016年度は、これらの指摘を生かし、現状分析にもとづいた達成可能な数値目標を設定した。その際、既に学内

論議を経て、スーパーグローバル大学創成支援事業や女性活躍推進法の行動計画で実現可能な女性教員数が設定されていたことは幸いであった。それらの数値を参考にしながら、2021年度に女性教員を23パーセントに、女性の科学人材育成補助事業であることから、とりわけ自然科学系女性教員を15パーセントに引き上げることを目標値として設定し、申請することを常任理事会での議を経て全学部長に承認いただいたのである。

申請当時、総務担当常務理事であった私には、面接審査で終わってしまった2015年度の失敗を繰り返すわけにはいかない、2016年度はラストチャンスだと

思い、必ずや採択されなければならないという点でかなりのプレッシャーがあった。そのような状況のなか、2016年度も2015年度と同様、吉田学長および野口研究部事務部長と共に面接審査に臨んだ。最初に行われた学長の目標達成に向けた決意表明ともいえる積極的な発言に後押しされるような形で、申請の具体的内容を時間内で説明することができた。引き続き質疑応答も全員でスムーズに対応することができ、今回は採択されるのではという期待感を全員が抱いて京都にもどったように思う。

結果、「三度目の正直」で申請内容は認められた。が、申請業務は採択されてからが勝負。具体的数値目標を

達成するためには、男女共同参画推進リサーチライフサポート室の設置はもちろんのこと、学内託児所の設置などの基盤整備が必要となり、目下全学をあげて困難な課題の実現に向け検討されていることは画期的なことであると思っている。

仕事と家庭を両立させ、働きやすい環境をつくっていくという基本的視点は、女性教員・研究者のためにというだけではなく、全ての教職員が自らの能力を十分に発揮するために不可欠のものである。とくに、政策決定に大きな影響力を持つ幹部教職員には、常に意識しておいていただきたい視点である。

